

# 論文の内容の要旨

農業・資源経済学 専攻

平成 22 年度博士課程 進学

氏 名 趙 玉亮

指導教員名 安藤光義

論文題目 食料問題の新たな局面に対応した農民專業合作社の形成と発展方向  
— 中国華北地域の優良小麦生産を事例にして —

## 第 1 章 問題意識と課題の設定

中国における食料問題は「絶対的不足」から「質的向上」へ変容しつつあるが、食料の供給を担う農業生産・流通構造は依然として小規模農家が大宗を占める構造のため、食料問題と農業構造との間に大きなズレが存在することが問題視されている(図 1)。

図 1 現段階における中国の「食料問題」と「農業構造」

食料問題	食料問題の第 1 局面 (穀物の絶対的不足)	→ (1990 年代末に糧食過剰 を迎えることを契機に)	食料問題の新たな局面 (食料消費の「質的向上」)
農業構造	零細分散な小農+流通統制	→ 農業構造の変化をも たらす要因	零細分散な小農+流通市場化

↑↓ ズレ

出所：筆者作成。

注：中国における「糧食」はやや広義の概念で、穀物のほかにイモ類や豆類が含まれる。

絶対的な食糧不足の問題を解消するため食糧増産政策が進められた結果、食糧供給の絶対的不足という食料問題の第 1 局面から脱出することに成功したが、1990 年代末に食糧は生産過剰となる。そして、高度経済成長による所得の増加に伴い、食生活の高度化や多様化が急速に進んで食料消費は「質的向上」を遂げ、中国の食料問題の新たな局面に突入した。

しかし、「零細分散錯圃」に特徴づけられる小農生産は、①経営規模が小さく、農業生産の収益性も低く、市場動向を反映した商業的農業を行うインセンティブが不足しており、②市場情報の獲得、販売ルートの開拓、新しい生産技術や標準化された生産を採用するための専門的

知識、高度化かつ多様化するニーズが求める品質・品種に対応した検査・監視システムの構築などのノウハウがないという問題を抱えている。

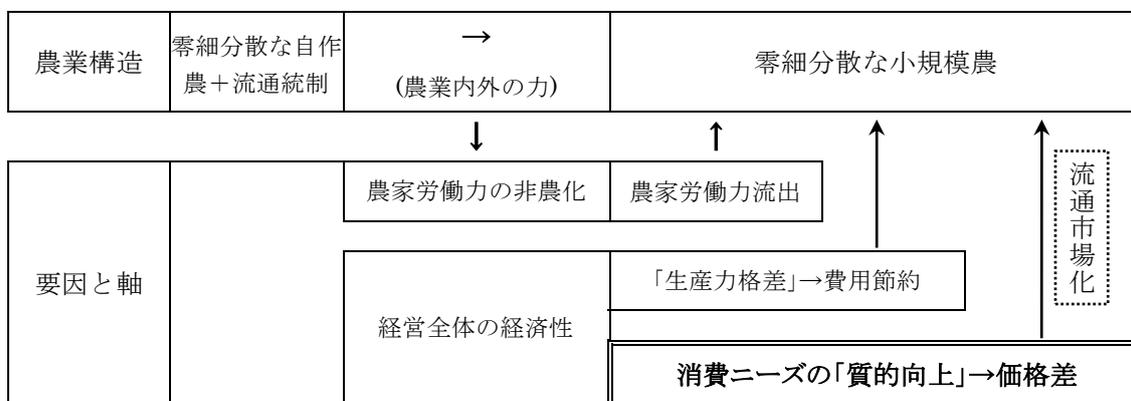
本論文の課題は、こうした課題を克服するために登場した農民專業合作社の形成過程とそれが大規模経営体へ成長するメカニズムを解明することにある。農産物の中で基本的な地位を有している穀物、特に旧来型の消費から大きく変化をみせている小麦を取り上げ、中国華北地域の小麦主産地の事例分析を通じて、農民專業合作社を中心とする優良小麦の生産・流通一貫体制が確立される過程を明らかにする。具体的には次の3つの課題を中心に分析を進める。1)小麦消費の「質的向上」によって優良小麦の調達課題となるが、それが零細な農家が担う生産構造では対応できないことを明らかにすること、2)その対応策としての小麦合作社が設立された過程の解明と現状の分析、3)農民專業合作社の発展メカニズムの明らかにし、今後の発展方向を展望することである。その際、①商品市場の特徴、②耕地利用、③合作社の運営管理の特徴、④分配関係に注目する。

食料消費の質的向上という食料問題の新たな局面に小農生産が対応する過程で生まれた生産と消費をつなぐ組織化の論理をもった歴史的な性格を有するものとして農民專業合作社を把握することにしたい。

## 第2章 研究の視点と方法

中国の農業構造を変動させる要因としては、非農産業の発展による農家労働力の非農化、農業経営間の「生産力格差」の形成、食料消費の「質的向上」の下で形成される「価格差」などが考えられる(図2)。この高い「プレミアム価格」と市場の一般的な価格との「価格差」は農業経営の発展にとってプラスに働く。本論文は、この「プレミアム価格」での販売の実現が農民專業合作社の形成や成長にもたらす経済的意義を中心に検討を行う。

図2 食料消費の「質的向上」と「農業構造」との関係図



出所：筆者作成。

分析にあたっては、統計資料、政策文書や政府報告書、新聞報道等の資料に基づき、中国における小麦商品についての概念と市場変容の過程を整理するほか、食糧主産地における現地調査に基づく分析を行う。

### 第3章 小麦需要の「質的向上」への変容と優良専用小麦の調達のための課題

小麦を原料とする食品消費は簡便化、洋風化が進んでいる。それに応えるために、均質で専用性を持つ優良専用小麦の生産拡大が強く求められている。優良専用小麦の商品特性と品質を確保するための技術的な要求に対して、零細分散錯圃に特徴づけられる生産構造は応えることはできない。そのため、農家の生産段階から介入した、流通も含めた一貫した調達体制を構築する必要がある。企業による契約生産は1つの対策だが、個々の農家の生産への介入に多大な取引コストが生じる一方で、契約履行率は低いという限界がある。また、流通も優良専用小麦のニーズに対応できていない。国家糧食ステーションは政策業務が中心であり、品種別・商品別の買付けは行っておらず、仲買商人も買付けは偶然で不安定であるため、農家の組織化が行われることになるのである。

### 第4章 小麦主産地における小麦良質化の展開と合作社を中心とする産地システムの確立

小麦合作社は農家を組織して農家の生産過程に介入し、農家の共同化行動によって、標準化された生産を全面的に実施することで小麦の品質向上を実現している。そして、生産された優良専用小麦を「プレミアム価格」で販売しており、従来よりも高い収益性を実現している。生産段階において、生産資材や農業サービスの共同購入が農家にとってコストダウン効果をあげている。ただし、前者の効果の方が後者よりもはるかに大きいことが調査結果から明らかとなった。「プレミアム価格」実現による収益の増加が合作社の形成の大きな要因なのである。

### 第5章 小麦合作社の経営実態と「大規模経営体」の性格

近年、小麦商品の差別化が進み、同じ小麦でも商品間の価格差が大きくなっている。それは合作社からすると直接生産に乗り出す経済的インセンティブが強まっていることを意味する。合作社は農家を選別することなく積極的にメンバーとして受け入れ、栽培基準を統一した効率的な農作業を実現するため彼らの農地をまとめている（団地造成）。さらに合作社自らが借地経営を行うケースが急速に増えてきている。合作社はメンバーとなっている農家からの「手数料」徴収や収穫物販売の「価格の上乗せ」を通じて収益をあげているが、その大部分は農家に分配されている。そこで出資者・経営者は自らの取り分となる収益を高めるため、高い地代と引き換えに耕地を借り入れて経営を行っていた。その際は、まず零細な耕地を団地化し、その後で借り入れるというプロセスがとられている。

合作社は、設立者・管理者、「中心会員」、一般のメンバー農家から構成されており、それぞれの役割や機能も異なる。一般のメンバー農家が関与するのは生産部門だけであり、単なる作業単位となってしまっている。農家を組織するための共同化行動(団地づくり、生産資材の共同購買、標準化された生産、買付など)においては、人望の厚い人物、あるいは村の幹部となる「中心会員」が大きな役割を果たしていた。彼らは自らの人的ネットワークを使用して合作社のための団地造成を積極的に行い、合作社から一定の報酬を受け取っており、実質的な雇用関係にある。設立者・管理者は事業内容、販売先の開拓、価格交渉などの意思決定を行うマネジメントの機能を果たしている。合作社の出資は少数農家によって行われ、出資割合に応じて利益が分配されているケースが多く、合作社の本来の趣旨から逸脱している面がみられた。

## 第6章 農業機械合作社の展開と経営実態

合作社の多くは農業機械作業を農業機械合作社に委託している。農業機械合作社は農業機械を所有する農家の連合組織であり、省を越えて作業受託を行うなど積極的な経営を展開している。しかし、作業受託の収益性は低く、不安定であるため、近年では借地による農業経営に乗り出していた。

## 第7章 結論と展望

合作社は農家を組織し、個々の農家の生産過程や流通に介入することによって優良専用小麦の生産を拡大し、その大量集荷を実現するために有効に機能している。それを通じたプレミアム価格での販売による収益増加が合作社の形成にとってのポイントである。また、優良専用小麦の生産・流通ニーズに応じるために耕地の団地化利用も進められていた。近年は、そうした農地を借り入れて農業経営を自ら行うケースも出てきている。

だが、国内産の優良専用小麦は価格が大きく上昇しており、海外産と比べて価格優位性を失いつつある。そのため内陸主産地に展開する小麦合作社は価格リスクに晒されている。合作社制度自体も、①出資者のインセンティブと一般農家の利益との間のバランスをどうとるか、②合作社の運営管理における法制度をどう遵守するかという課題が残されている。